
アヴァンジュールへGO！

kurochan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アヴァンジュールへGO！

【Nコード】

N2204U

【作者名】

kurochan

【あらすじ】

幼い頃、異世界に召喚された斎木 恋歌^{レンカ}は救世主として世界を救い、大帝国皇帝の養女となって何不自由のない生活を満喫していた。

そんなある日、彼女の耳に異世界から届いた救いを求める男の声。無視しようかと思ったものの、退屈な日常から脱却できるのでは？ という淡い期待に心が揺れ、思わず呼びかけに応えてしまう。そうして訪れた二つ目の異世界アヴァンジュールで、レンカは平和の御使いとして起つことを求められるのだが…

20011/07/25 タイトルを変更しました。

なお今回は全年齢対象ですが、当作品はいずれR15になったり、残酷な描写を含む可能性もございます。読まれる際にはくれぐれもご注意ください。

アヴァンジュールへGO！（前書き）

異世界トリップものですが、今回はまだ飛びません。

話数もさほど長くない予定です。

あと、今後話の展開上外せない差別用語などが頻繁に出てくる可能性（あくまで可能性ですが）がありますので、そのような表現が苦手な方は読まれないようにお願いいたします。

現実とフィクションは全く別物と割り切れる方のみ、先へとお進みください。

アヴァンジールへGO！

アヴァンジール

世界はすでに500年に渡り、乱世のただなかにあった。

力ある者が力なき者を力づくで支配し、天下を狙って争い合うまさに戦国の世。

数え切れないほどの人の命が露と消え去って行く日々。

いつ終わるともしれない戦乱の中、世界の行く末を憂うひとりの少年王が立ち上がる。

彼に従うは、勇ましき15人の騎士。

黄金の鎧に身を包み、戦場^{いくさば}では常に先頭に立って敵をなぎ払うその姿に、いつしか少年王は『金の獅子王』と呼ばれ、恐れられるようになっていった。

彼が望むのは、穏やかなる日常。

過去の物語に描かれる、命を脅かされることのない平和。

だがそれを手に入れるには、彼自身が血の色に手を染めねばならない。

平和とは相反する戦いに身を投じながら、少年は幼い頃からの夢を叶えるため敵の血で全身を染め、いつしか世界は統一への道を進みはじめる。

そして時は過ぎ去り、少年は成年となり、世界で最も恐れられる統一王になろうとしていた。

その日、アヴァンジールとは異なる世界ガリアスに存在するオールディン帝国では、リディアーナ皇女の生誕祭が開かれていた。

世界最大の領域を誇る帝国の皇女の生誕祭だけあってその規模はとてつもなく大きいものだ。

その日は毎年全世界の国々で休日とされ、世界中のの主要都市で祝い酒が無料でふるまわれ、もめごとさえ起こさなければ多少のことには目をつぶる無礼講——飲めや踊れの大騒ぎが各国の支配者たちの勅命によって許可されていた。

この生誕祭は帝国皇太子の……いや、皇帝の生誕祭さえも超える規模で行われているのだが、そのことに異論をとねえる者は帝国臣民……いや、世界中に一人も存在しないだろう。

なぜなら皇女はこの世に並ぶ者なき大魔術師であり、世界を滅亡から救った救世主であり、当人いわくカミ様！　なのだから。

しかしながら実はこの生誕祭、皇女の本当の誕生日ではない。彼女の誕生日は実際には、この日からピッタリ半年後なのだ。

ではなぜこの日を生誕祭としているのか？

それは15年前の同月同日に、彼女がこの世界に召喚された異世界人からだ。

人を鬺り、喰らい尽くそうとしていた魔物を滅ぼすために、オールディン帝国皇帝であり魔術師でもあったガヴェインが二千年に及ぶ神への祈祷の末に召喚した救世主。

それがオールディン帝国皇女リディアーナ・レンカ・オールディンなのである。

「今年の生誕祭もお祭り騒ぎね」

庶民が身につける地味な木綿のワンピースに身を包んで城を抜け出し、たった一人でリディアーナ皇女ことレンカは活気に溢れた市場を歩き回っていた。

誰が見ても息を飲むほど美しい姿をしているのだが、下卑た誘い文句をかける者は一人も存在しない。

そもそも木綿のワンピースを身につけているのは皇女であることを隠すためではなく、街の雰囲気溶け込むためだし、一人の護衛も付けていないのは護衛などいなくても自分の身は確実に守れるからだ。

この世界に召喚されてからわずか半年で5歳の少女が魔物の99.5%を殺し尽くしたことは、赤ん坊でも知っている！と言われるほど有名な話だ。

ちなみに生き残りの0.5%は、レンカの使い魔となっている見目麗しい上級魔たちである。

どのような方法を使って上級魔を使い魔として束縛することに成功したのかは、レンカと使い魔となった魔物にしかわからないことだが、幼い頃から普通の人間とは言い難い存在だったことは間違いない。

それでも人柄は気さくで、身分の上下なく誰とでも対等に付き合うレンカは帝都の人気者だった。

「リディア様、こんにちはー」

「こんにちは」

「お誕生日おめでとうございます。リディア様」

「どうもありがとう。でも女性に年齢は絶対に聞かないこと。蹴飛ばすわよ」

「今日もお綺麗ですね、姫様」

「あら、お世辞でも嬉しいわ」

老若男女構わずさまざまな人々から声を掛けられ、それに笑顔で答えながらレンカは市場を歩き回る。

あと30分ほどで昼食時という時間帯。

朝から市中を歩き続けたレンカの腹の虫はそろそろ泣きだしてしまいそうだ。

『あー、お腹空いたな。何か食べようかな』

にこやかな笑顔の下でそんなことを考えながら、レンカは最も鼻につくおいしそうな匂いのする方向へと進んでいく。

市場に並ぶたくさんの屋台から活気にあふれた呼びこみの声がかかるが、彼女は今一番心揺さぶられる食物の方に意識を集中させ、そちら側へと歩を進めた。

「あつ、みつけた」

そして少し歩いて目的の屋台——肉の串焼きを売っている——を発見すると、一目散に駆けだした。

「おじさん、串焼き肉5本ちょうだい」

鈴を転がすかのような美声でレンカが注文すると、店主は「あいよっ」と返事をして炭火で焼いている串焼きを包み、レンカに差し出した。

「5本で500リルだよ」

「はい、ピッタリ500リルね」

ポシェットの中からお金を取り出し、店主に渡して包みを受け取る。

「毎度あり。で、これもどうぞ」

店主は代金を籠の中に放り込み、空いている方の手で串焼き肉を一本取ってレンカに差し出した。

——？

「お誕生日おめでとうございます、リディア様。これはあつしからのお祝いということで、たいしたものではないけど受け取ってください」

店主からの意外な言葉にレンカは居を突かれたような顔をしたが、すぐにそれを微笑みに変え、

「ありがとう、おじさん。遠慮なくいただくわ」

そう礼を述べると軽く会釈をして、彼女が購入したものを買おうとする客であつという間に行列のできた店をあとにした。

『うーん、おいしそう。いっただつきまーす』

行儀が悪いのはわかっているが、おなかと背中がくつつく寸前まで追い込まれていたレンカは、人目も憚らずおまけとして手渡された串焼き肉に食いつく。

見た目とは裏腹に、柔らかく上質の肉から溢れる肉汁が口の中いっぱいに広がると、それだけで幸福感に満たされる。

肉だけでは栄養的にどうよ？　と思いつながらも、とにかく今は串焼き肉を完食してやろうと意気込むレンカだった。

レンカが生誕祭を気ままに楽しんでいる頃、異世界アヴァンジールにおいて『金の獅子王』と呼ばれるレドニア王国国王バルドウィン・アウグストス・ファイン・グリュンタールは、自国の大聖堂の一室で神官長と大魔術師長を兼任するゴットリーフ・フレンツルの

説明を受けていた。

室内には彼らの他にも、王国宰相を務めるセアド・ベア・リイン・アジッチ公爵と近衛將軍を務めるバウル・ハイドルフが無言で控えていた。

かつての少年王もすでに29歳の立派な王へと成長し、群雄割拠の戦国時代も半ば以上終息に向かい、世界が落ち着きを取り戻すまでと少しというところにまでさしかかっていた。

だが平和まで少しだからこそ残った敵は手強く、ここ2年ほど戦況はほとんど動かない状況にあり、口にこそ出さないが、誰もが内心焦りを感じ始めていた。

中でもバルドヴィンと共に新たな世界を創造しようと誓ったフレンツルの焦りは激しく、彼は寝る間も惜しんで平和な世界を導き出すための術の錬成に明け暮れていたのである。

そしてついに先ごろ、その術が9割がた完成したのだ。

あとはバルドヴィンの許可を得て最後の詠唱を行えば、平和の御^{つか}使いがレドニア王国に降臨する。

「…つまり、平和の御使いとやらを召喚するために、余の許可が欲しいというのだな？」

「はい」

「平和の御使い、な……御使いというからには形ある生物と考えてよいのか？」

「はい。古文書には御使いとは我々と同じヒト型の神の御使いである、と記されております。過去に召喚されたお二人の御使いはその力を持って世界を安定に導いたとあります」

フレンツルの答えを聞いたバルドヴィンは「そうか」と頷くと、静かに目を閉じて思案を始め、フレンツルは彼の思考を妨げまいとただ息を潜め、沙汰を待つ。

「許可しよう。このまま敵国と膠着状態が続くことは余の本意ではない。平和の御使いがどのような存在なのかこの場の話だけでは理解できぬが、何もせず手をこまねいているよりはましであろう」

「ありがとうございます。この命を賭けて必ずや召喚を成功させてみせます！」

この世界で彼しか持たない漆黒の髪を前後に揺らしながら、フレンツルは部屋の中央に進むと呪文を唱え、2年がかりで完成させた魔法陣を発動させる。

「フレンツル、まさか今すぐに召喚を行うつもりか？」

さすがに今すぐという展開は予想していなかったのか、バルドヴィンは驚きの声を上げる。

「善は急げと申します。陛下のお許しを得られたのですから、今すぐに御使いを陛下の元へ呼びし、一日でも早く平和な世界を作り上げたく存じます」

狂信的にも見えるその姿に一抹の不安を感じつつ、

「そうか…そうよな。まあ、好きにいたせ」

どこか投げやりに言いながら、これまで見たどんな魔法陣よりも神々しく繊細で精密なそれに、バルドヴィンだけでなくその場にい

る皆が視線を奪われるのだった。

アヴァンジュールへGO！（後書き）

次回、レンリが飛びます。

出来るだけ早く次話をUPするつもりですが、プライベートが忙しいので気長に待っていただけると幸いです。

脅しまがいの次話催促はお断りしますが、優しいお言葉をかけていただければやる気がわきます。

アヴァンジュールへGO！ ～2～（前書き）

前回のあとがきでレンカが飛びます！と書きましたが、実際に話を書いていくと予想もしていなかった展開になってしまいました。

一応、異世界に飛ぶんですけどね…ホント、ただ飛ぶだけであちらの方々とはまだ出会いません。

もしかしたら期待はずれな内容かもしれませんが、お読みいただけたら幸いです。

アヴァンジールへGO！　ゝ2ゝ

『うーん、このお肉本当に美味しい』

チラチラと遠慮がちな視線を感じながらも、食べ歩きをやめようとはせずレンカは串焼き肉に食いついていた。

王宮では食べられない素朴かつ野性的な料理に舌鼓を打ちながら、レンカは1時間ほど前から脳裏に響く男の声に聞き耳を立てる。

放っておけば諦めて静かになると思っていたが、予想外に男はしつこい。

“神よ。偉大なるトゥーラ神よ。どうか我らを憐れと思し召し、世界を平和へと導く御使いを我らがもとへお遣わしてください。どうか、どうか、我らが神よっ”

喉が切れてしまいそうなほどに大きく真摯な声だ。

これまでも何度かレンカにまで届いた異世界からの呼び声の中でも、トップ3に入るほど強い思念を感じる。

それはつまり、レンカ以外の力ある存在に——簡単に言うなら神々にも届くほどの真摯な声ということになる。

『誰でもいいから応えてやれよ！ 私に声を届けられるってことは、それ相応の力を持った白い神官か魔術師の声なんだろうからさあ』

美少女顔の口元を肉汁で汚しながら、お姫様育ちとは思えない汚い言葉を心の中で呟く。

するとそれに応えるように、祈りを捧げる男とは全く別の澄み切った声が彼女の脳裏に響いた。

『うーん。応えてあげたいのはやまやまだけど、正直僕の世界には御使いになれるほどの力を持ったコがいないんだよ』

『あ、うちもだよ。なんでだろ？ 最近、力のある救世主が生まれないんだよな』

『そうそう。でも考えようによっては、そういう存在が生まれる必要がない世界が多いってことじゃない？ これっていいことだよね？』

声は素晴らしくいいのに、話している内容はどこぞの主婦の井戸端会議のようなのほほんとした雰囲気だ。そのあまりのギャップにレンカのこめかみがひくつく。

『わわわっ、ごめんレンカ。別に茶々を入れるつもりじゃなかったんだよ』

『同じく』

『そうそうそう！ 何が言いたかったかというと、僕たちの世界には御使いとやらになれる人間は存在しないってことなんだ！』

それに気付いたのか、声の主たちは慌てて自分たちの発言を取り繕いはじめた。

『ふうん、そっかー。しっかしあんたたち神様のくせに、私たちに

声を届けられるほどの神官の声を無視しようつての？』

まったく異なる場所に存在するにもかかわらず、レンカに声を届けた神様たちの周囲に零度の風が纏わりつく。

『ひいー、ごめんなさーい。まだまだ僕は未熟です。修行頑張りますから許してえ』

『同じく、死ぬ気で修業しなします。絶対死なないけど』

『僕もです！ でもレンカ。僕たちはともかく、君、暇なんでしょう？ だったら君が応えてあげたらいいんじゃないの？』

む？

レンカの歩みが止まる。

『平和の御使いを求めらることは、その世界は相当に病んでるってことだよ。ガリアスを安定させた神その力をあっちでもう一度使えば、少しは暇がつぶれない？』

むむう？

『それグッドアイデアだね。レンカってば、最近退屈でしかたがないからって時々ガリアスから抜け出して、生まれちぎゅうた世界に遊びに行ってるもんね。生まれちぎゅうた世界に行くのも、召喚にんてどこかの異世界に行つて人助けするのも別に変わらないんじゃないの？ なにより魂の修練にも繋がるし、一石二鳥だよ』

心の琴線に触れる言葉にレンカは思考を巡らせた。

頭の中に直接話しかけてくる連中の言う通り、最近暇を持て余しているのは事実だ。

15年前に魔物討伐を成し遂げて以来、この世界は平和を享受している。ガリアス

魔物の存在が忘れ去られた未来において人間同士の間で争いが起こる可能性はあるが、今は長く続いた脅威がなくなり人々は生を謳歌していた。

救世主として召喚されたレンカにとっては満足のいく結果と言えるだろう。

レンカは救世主であると同時に、ヒトを超えた存在——ぶつちやけ、神様の一員なのだ。

なぜヒトとして生まれたの？ という素朴な疑問はいずれ判明することがあるかもしれないが、とにかく只人^{ただひと}ではないのである。

ヒトという種族だけを特別扱いするつもりはないが、自分たちに似た姿に進化した彼らに神々が愛着を感じているのは確かだ。

だからこそ、困った時の神頼みの質が高ければ呼びかけに応じることもあるし、世界を救うために力を貸してやることもある。

基本的には自らがつくりだした世界に干渉するのが普通だが、レンカは様々な面で規格外の実在なので、自分が気に入った世界で好き放題しまくっているのだ。

『その気になってきたんじゃない？ それにさあ。召喚に応えてあっちに行っても、帰りたい時はいつでもガリアスだろうとチキユーだろうと、レンカは好き勝手に行き来できるんだから問題ないでし

よ？
』

『うん、僕もそう思う。ま、人間じゃなくて女神様が召喚に応えるってどーよ？　って気もするけど、召喚主にはレイカが女神様だなんてわかりはしないんだから、暇つぶしに行ってきたら？』

『絶対にいい暇つぶしになるよ。結果がどうなろうと、レンカが選んだ結論に誰も文句は言わないんだから、行ってきたよ』

後押しするかのようになられて、ムクムクとその気が湧いてくる。

『むむむむう……心が揺れる……。でも今日は一応、私の生誕祭なのよね。夜には皇帝主催おごつかいの夜会が催されるのに、主役がいないって問題じゃない？』

『そんなの生まれうみた世界に帰っている時のように、レンカの使い魔を君に化けさせていけばいいでしょ』

『ああ、その手があったか。じゃあ、その問題はクリアということでもいいけど、残る問題は召喚主の世界を管理するトゥーラ神とかいう御仁が、私が召喚に応えることを由とするかどうかよ』

ガリアス
異世界の皇帝ガヴェインの召喚に応じた5歳の頃は今以上に傍若無人で、向かうところ敵なし！という気分だったので好き放題しまくったが、今のレンカは分別のつく立派な成人おとなだ。

自分の管理する世界ならともかく、他者の管理する世界を好き放題するわけにはいかないだろう。

『それなら気にしなくていいよ。トゥーラはとくにあの世界を見捨てちゃってるから。それどころか世界の管理に失敗したショック

で引きこもりになっちゃってんの。もしレンカが召喚に応じるなら、召喚先の世界の所有権を付録で差し上げまーす、ってトウーラから思念波が入ったよ。口約束が不満なら、書類もすぐに送るってさ——って、言ってる傍から僕の手元に届いてるし」

なぜレンカ本人に届けないのか謎だが、この程度のことではいちいち腹を立てても仕方がない。

神様なんてものは、自己中心的で変わり者が多いのだ。

『トントン拍子に話が進みすぎて、仕組まれてる？　って気がしなくもないけど、何の問題もないなら行っちゃおっかな』

世界の所有権なんてどうでもいいが、レンカと他の神々が念話している間も必死で召喚の呪文を呟き続け、しまいには泣き声を張り上げ始めた召喚主が気になって仕方がない。

オルディン

この国を捨てて異世界に移住する気はないが、旅行に行くと思えば良いのではないかと？　とレンカは思った。

『よし、決めた！　お父さまには悪いけど、使い魔^{シャーリ}を私に化けさせて、私はあっちの世界に行くわ！』

『『『最高の決断だよ、レンカ！』』』

『ふふふつ、ありがとう。ただし私は暇つぶし——ぶっちゃけ観光に行くのであって、召喚主の願いを聞いてやるかどうかは行ってみなくちゃ分からないわよ』

観光いう部分を強調して、レンカは手にしていた串焼き肉に噛みつく、素早く脳裏で自分が不在になった後のガリアスを守護する

ための術を展開していく。

それと同時に過去の魔物討伐の際、自身に忠誠を誓い、使い魔となった魔物^{もの}たちにも指示を与えていった。

そしていずれは使い魔^{シャーリー}が偽物であることに家族が気付くことも想定して、その際に渡す手紙も用意すると、『また私は留守番なのですね』と言ってさめざめと泣く使い魔^{シャーリー}に、手紙を転送した。

その間わずか1分半。

『ではでは。想定外の展開になっちゃったけど、召喚の声に応じましょうか！』

景気づけとばかりに、新たな串刺し肉を取り出してレンカは静かに目を閉じた。

その瞬間、レンカの周囲を銀色に輝く召喚の魔法陣が取り囲む。

『『『レンカ、いつてらっしやい。新しい世界ですばらしい出会いが待っていることを祈るよ』』』

全身を銀の光に覆われ異世界に引つ張られるのを感じたレンカの脳裏に、3人の神々の楽しそうな声が響き渡るのだった。

アヴァンジュールへGO！ ～2～（後書き）

前書きにも書きましたが、期待はずれな内容だった方、すみません。レンカってば、普通の娘さんじゃないんですね。とりあえず次回には召喚した側の皆さまとご対面です。正直、どんなことが起こるか作者である私にもわかりません。こんな作品でよろしければ、この後もしばらくお付き合いください。

アヴァンジュールへGO！ ～～（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません。今回も楽しんでいただけると幸いです。

ちなみに今回は《 》が心の中の声、『 』が異世界語、「 」が現地の言葉となっております。ややこしくて申し訳ありませんが、話の進行上どうしても必要なことだとしてご理解ください。

アヴァンジールへGO！　くくく

平和の御使いの召喚は、思いのほか時間が掛かるものだった。

魔法陣は発動しているので術式が間違っているということはないのだろうが、どれほどフレンツルが呪文を唱えようと魔法陣は銀色の輝きを放つばかりで、御使いが現れる気配はない。

時間だけが無情に流れてゆき、大魔術師と称されるフレンツルの額からは大粒の汗が噴き出しはじめていた。

国王であるバルドヴィンは決して暇ではない。放っておいても、次から次へと様々な問題が湧いて出てくるのだ。できることならこの場を立ち去り執務室に戻りたいが、魔法陣が光を放った状態で部屋の扉を開くことはできない。

そんなことをすれば召喚が失敗するばかりか（正直それは失敗しても問題はないのだが）、魔法陣が暴発してしまうだろう。

それを思うと、内心いらつきながらもその場に残るしかなかった。

しかしその後1時間が過ぎても、変化は訪れない。

さすがにここまでくると、普段は温厚な宰相ですらいらつきを見せはじめていた。

それを感じ取ったフレンツルは、それこそ泣きながら古代語の呪文を唱える。

戦乱の世を終結させるに足る力を持つ平和の御使いは、疲弊しき

った世界を救うためにどうしても必要な存在なのだ。

自分のためではなく、世界のために！

フレンツルは願った。

全身全霊を込め、彼自身の命をも捧げる覚悟で唯一神トゥーラに
対して。

《平和の御使いを我らがもとへっ！》

あらぬ限りの声でフレンツルが叫ぶと、突然。本当に突然、場の
空気が揺らいだ。

魔法陣から放たれていた銀色の輝きは黄金色に変わり、召喚を行
っている大聖堂の祈りの間全体が虹色の光で溢れかえる。

それと同時に感じたのは、恐ろしいほどの威圧感。禍々しい威圧
感ではなく、神々しいまでの威圧感だった。

輝きを増す黄金色に、誰もが目を閉じてしまう。

『とつちやく』

太陽が破裂してしまったのではないかと思うほどの光の中、目を
開けられずにいる四人の鼓膜を聞いたこともない声が揺らし、それ
に合わせるように威圧感が霧散する。

男には持ちえない、鈴を転がすような可憐な声音に誰もが驚きながら、声のする方に意識を集中させた。

『やっぱり召喚と言ったら魔法陣よねえ。レトロな感じが最っ高！』

魔物討伐後のガリアスでは滅多に見れなくなった魔法陣それに、召喚に応じたレンカの視線は釘付けた。

人間が作り上げた魔法陣の中では最上級クラスの緻密な文様に、作成者の苦勞が伺える。

作成には年単位の期間を有しただろう。

これで誰も召喚できなければ、泣きつ面に蜂である。

召喚という他力本願な手段自体はあまり気に入らないが、召喚主と必死な声の理由がわかったことにすつきりする。

レンカはすつきりついでに、異空間ではあえて口にしなかった串焼き肉を頬張った。

『冷めても美味しいなんて、この味、本物ね』

その頃になると部屋全体を覆っていた輝きは、わずかな残光だけを残し落ち着きを取り戻していた。

眩しさを感じなくなった四人が目を開けると、その視界にとてつもない美少女の姿が飛び込んでくる。

「く…黒、髪？」

近衛將軍のハイドルフが驚きの声を上げた。

それは彼らの生きる世界で、^{アヴァンジュール}どんな色にも染まらない唯一色とされる最も高貴な色であり、全世界に3人しか保有者のいない色なのだ。

召喚された平和の御使いが高貴なる黒を纏っているとは、誰も想像していなかった。

が、それ以上に彼らを驚かせたのは、御使いが年端もいかないう少女だったことである。それはまさに想定外の事実だった。

「ハインツル」

バルドヴィンが抑揚のない声で名を呼ぶと、呆然を通り越し愕然としていたハインツルは我に返り、その場で両膝を折って額が地に着く勢いで頭を垂れた。

「…疑いたくはないが、アレ…いや、あの少女がそちの言う御使いか？」

美しい女を見慣れてきたバルドヴィンをもってしても、“あり得ない美貌”と認めざるを得ない少女に疑いの目を向けてしまう。

「それは…はい。私の錬成した魔法陣から出現されたのですから、平和の御使いに間違いはございません？」

平伏したまま、疑問形を疑問形で返すという歯切れの悪い答え方をする。

「…そうか。そちがそう言うのなら、御使いに間違いはないのだろう

な。しかし……美しさはともかく、何とも豪快な娘だな」

バルドヴィンたちの視線を気にするでもなく、串に刺さった肉を食する姿に本気で驚く。

召喚される側がどのようにして送られてきたのかは当事者でないのだから、突然、見も知らぬ場所へ送り込まれたであろう少女が平然と立食する姿は異様だった。

「この状況で食事ができるなど、よほど神経が図太いのか、あるいは阿呆かのどちらかであろうな」

バルドヴィンの発言に、レンカの動きがピタリと止まる。

――？

平伏したままのフレンツルを除く3人が未知の生物を見るような目で自分を見つめているのを見返しながら、レンカは口になっていた肉を嚥下し、串焼きの包みをそつと床に置いた。

そしてそのままフレンツルの脇をすり抜け、バルドヴィンの正面まで足を進める。

近くに寄られると髪ばかりでなく、瞳の色まで黒いことがわかる。髪色はともかく、瞳まで黒い人間を見るのは彼も初めてだった。

「な、何だ？」

普段のバルドヴィンからは聞かれるはずのない動揺を含んだ口調に、ハイドルフが慌てて身体を動かした。

だがハイドルフが二人の間に割って入るよりも早く、レンカの細い腕がバルドヴィンに伸ばされる。

『他力本願にも自分の世界とは関係のない異世界から救世主を召喚しておいて、人のことを図太いだの阿呆だのあんた何様？ もっと他に言うことはないの？』

あえて言葉を合わせていないだけで、この世界に現れた瞬間からレンカはこの国の、いやこの世界で使用されているすべての言語を理解することができるのだ。

レンカはバルドヴィンには理解できないオルテイン異世界語で言いながら、その胸倉を掴み上げる。

一見すると可憐な美少女だが、人であって人ならざる存在であるレンカの手をバルドヴィンは振りほどくことができない。

「なっ！ 貴様っ、王に何をするっ！」

ハイドルフが抜刀し剣先をレンカに向けるが、見えない壁に弾かれるように剣先が跳ね返ったかと思うと粉々に砕け散った。

その様子に、皆が驚きに目を見張る。

『うるさいわよ、外野。別にこの俺様野郎を殺そうというわけじゃないんだから、黙って見てなさい』

レンカは右手でバルドヴィンの胸倉を掴んだまま言うと、左手の人差し指で彼の額を突いた。

途端、バルドヴィンの頭の中をふわりと風が通り抜ける。

《もしもーし、私の声、聞こえる？ 聞こえるなら心の中で返事をすれば会話できるわよ、この俺様野郎》

《え？ …… あ、ああ、声は聞こえるが、これはそなたの声か？》

《当たり前でしょう。今あんたの胸倉掴んでるのは私なんだから。ところで、どうしてこんな状況になっているのか理解できますか？ 俺様改め異世界の王様》

王を敬う雰囲気など一切存在しない口調だが、不思議とバルドヴィンに怒りは湧いてこない。

《いや。悪いが理解できぬ》

どこか申し訳なさそうに答えるバルドヴィンに、レンカの怒りが急速に収まっていく。

《そうですね。では説明してあげましょう。俺様改め異世界の王様くどい呼び名でバルドヴィンに語りかけるレンカに、彼は畏怖に近い感情を抱いた。

彼の知る限り最も力の強い魔術師はフレンツルだが、その彼をもつてしても言葉を口にせず会話を成り立たせることはできない。

だが目の前の少女は、それを当たり前のことのようにやってのけているのだ。

口にしていた言葉は理解できない言語だったが、頭の中で受け取

る言葉は彼が理解できるように変換されている。

どのような力を使えばそのようなことができるのかわからないが、少女がフレンツル以上の魔術を扱える存在であることはわかった。

《あなた、私のことを不当評価したでしょう？ 図太いだの阿呆だの、失礼なことをおっしゃいましたよね》

少女に鋭く睨まれ、その凍てつくほどの冷たい美貌に本気で凍りつきそうになる。

《そ、それはすまなかった。そなたの人となりもわからぬうちに、失礼な発言をしたことを謝罪する》

若くして王となつて約10年。

誰かに対して頭を下げることなどなかったが、少女に対しては考えるより先に頭が下がった。

一方、あつさりと謝罪されたレンカは、

《まさかこんなにあつさり謝罪されるとは思わなかったわ。王様の割に偉ぶっていないのがいいわ。高感度急上昇って感じね》

《それは褒められたと喜んでよいのか？》

《そういうことかな。あなたが自らの非を認められないような愚王なら、私が直々に再教育を施してあげようかとも思っただけで、その必要はないみたい。とりあえず魂核にも淀みはほとんど感じられないし、この部屋にいる皆さんも悪い人たちでないことはわかったわ》

バルドヴィンの胸元から手を離して乱れた襟を直してやりながら、レンカは念話をやめて口を開いた。

「私は自分の気に入らない人間には協力しない性質^{たち}だけど、王様^{あなた}の素直さと召喚主の必死の呼び声に免じて話を聞いてあげることにするわ。あつ、でもその前にまずはお互いに自己紹介をしましょう。私はリディアーナ・オールディン。分かっているとは思いますが、異世界人よ」

突然、彼らと同じ言葉をしゃべりはじめたレンカに驚きつつ、バルドヴィンは頷いた。

「リディアーナ——そなたにピッタリの美しい名だな。余はバルドヴィン・アウグストス・ファイン・グリュンタール。レドニア王国国王をつとめている。壁際にいるのが宰相のセアド・ベア・リイン・アジツチ。そなたが剣を砕いた男が近衛將軍のバウル・ハイドルフだ。そしてそなたを召喚したのがそこに膝をついている黒髪の男で、大魔術師長ゴットリーフ・フレンツルだ」

「えーっと、王様がバルで宰相がベア。近衛將軍がドルフで、召喚主が……」

勝手な愛称をつけながら各人に目を向け、その顔を確認する。

ここでようやくバルドヴィン以外の3人はレンカが黒髪黒目であることを知ることになったのだが、なぜかレンカは召喚主であるフレンツルに目を向けると言葉を詰まらせ、視線をゆっくりと顔から頭へと移動させていった。

『…すごい…キラキラのテカテカだわ……』

再び意味不明の言葉を呟いて、フレンツル（の頭頂部）を凝視する。

「リディアーナ、どういたした？」

不審そうに問うバルドヴィンを無視して、レンカはまっすぐにフレンツルの方へ進む。

「み、御使いさま？」

わずかに声を震わせて見上げてくるフレンツルに、レンカはそれは嬉しそうな笑みを浮かべたかと思うと、先ほどバルドヴィンに対して行った行為と同じようにフレンツルの頭に向けて手を伸ばした。

「ひっ、ひいっ！ おやめくださいいいい」

フレンツルが絶望的な悲鳴を上げる中、レンカは彼の黒髪を掴んだかと思うと、そのまま彼の頭頂部から黒髪をひっこ抜いた。

「きゃー、思った通り鬘だったのね。ハゲだ、ハゲ。つるっばー」
「召喚主のおじさま、ぜひ、貴方のことをハゲと呼ばせてください。つか、呼ぶ。絶対呼ぶ。あなたは今この瞬間からハゲで決定的よ」

凍りつく男たちを尻目に、非情な言葉をフレンツルに向けたレンカはホーッホホホと異様な高笑いを部屋中に響かせるのだった。

アヴァンジュールへGO！ ～～～（後書き）

中途半端な終わり方ですみません。続きはできるだけ早いうちにU
Pできるように努力します。

アヴァンジュールへGO！ ～4～（前書き）

前回の更新から一カ月以上間があいてしまいました。途中で連載をはじめた“ふたなり”モノの恋愛小説にילהあげておりました。お待ちせして、本当に申し訳ありませんでした。

アヴァンジールへGO！　　ゝ4ゝ

その後、別室に移動して詳しい話をすると言っただバルドヴィンにレンカは、

「面倒くさいから今すぐここで立つたまま、簡潔に事情を説明して」と言い切った。

国王に対する不遜な態度にハイドルフは鼻息も荒く詰め寄ろうとしたが、華のように美しい顔でブリザードを心を感じるほど冷たく睨まれ、その場で硬直してしまう。

そんなハイドルフを尻目に、レンカは冷たい視線をそのままバルドヴィンに移す。

「ねえ、あなたたち耳はついてるの？ 私はここで事情を聴くって言っただのよ？ 私の言葉が理解できたのなら、すぐに説明を始めなさい。それができないのなら、私はこの場から立ち去って好きなところに行かせてもらおうよ！」

どこの女王様だ？ と突っ込みたくなるほど不遜な態度でレンカは言い放つ。

金の獅子王と呼ばれるバルドヴィンを一切恐れないどころか、圧倒している気配すら感じられる。というより、まさに圧倒していた。

幾多の修羅場を乗り越えてきたバルドヴィンにとって、女など取

るに足らない弱気生き物——次世代を生み出すための存在でしかなかったのだが、目の前に立つ異世界の女は、まだ幼さを残しているとはいえ彼の思い描く女性像からははるかにかけ離れた存在だった。

アヴァンジュール

この世界のことを何も知らない異世界人だとしても、バルドヴィンの醸し出す王者の風格を感じないはずがない。にもかかわらず、彼女はバルドヴィンの風格にも身分にも一切頓着していないのだ。

これまで誰からも畏怖される存在であつたバルドヴィンにとって、彼女の態度は驚きを感じると同時に新鮮なものだった。

「ほら、とつと話を進めなさい！」

見た目の割には立派に育っている胸を堂々と張りながらレンカが告げると、バルドヴィンは微笑を浮かべてハインツルに視線を向け、悲哀に満ちた表情で立ち尽くす彼に事情を説明するように命じた。

ハインツルの頭髪がとてつもなくさみしい状況であることはこれまで公然の秘密であり、あえて誰もそれについて触れたことはなかったのだが、こともあるうに王の前で自らの頭髪が存在しないことを暴露された彼はショックのあまり一時的に身体機能が停止していたのである。

が、王から直接事情説明をするよう命じられれば逆らうことなどできない。

「いやーん。ハゲおじさんが説明してくれるなんて予想外だわ、うれしー」でも頭頂部が神々しすぎて、顔を直視できないのが残念だわあ」

本気なのかおちゃらけているのか、その場にいる四人には判断がつかない。

だがここで横槍を入れると話が掻き回されてしまいそうで、レンカの発言に突っ込みを入れる者は誰もいなかった。

「み、御使い様に、喜んでいただけ、て、光栄です……」

ハインツルは今にも泣き出しそうな表情を浮かべながらも、この世界の実情とレンカを召喚した理由を彼女に説明しはじめるのだった。

* * *

「話はわかったわ。ハゲおじさんが私を召喚したのは、この世界の戦乱を完璧に平定させて、平和な時代を取り返したいからということなのね？」

「さようでございます……」

ハゲハゲと連呼され続けて心の中で流れていた涙も枯れ果てたのか、ハインツルは力なく答えた。

そんな彼をバルドヴィンたちは憐れに満ちた目で見つめる。

世界でもトップ3に入る大魔術師であるハインツルは、バルドヴィンでさえないがしろにできない存在だというのに、遠慮の欠片も

なくその身体的コンプレックスに触れるとは……恐るべし異世界の娘！というのが二人のやり取りを見つめていた三人の総意だった。

しかしまあ、国王であるバルドヴィンに対して齒に衣着せぬ物言いが出来るのだから、それも当然かもしれない。

「戦いを望まず平和を願うその思いは立派だね。でもそのために別の世界の人間を召喚することを、あなたは何とも思わなかったの？」

ハインツルのことをハゲとおちやらけて呼んでいたレンカが、突如表情を一変させる。

それまでのふざけた雰囲気は一瞬にしてなりを潜め、痛いほどの威圧感が彼女から発せられた。

「そ…それは……」

ハインツルは口ごもる。

“平和の御使い”を召喚するにあたって、何も考えなかったわけではない。

異世界人の召喚——それは御使いと呼ばれる存在を本来あるべき世界から有無を言わず呼びよせることだ。

家族も、日々の生活も、すべてを失う形で御使いはこの世界にやつてくることになる。
アヴァンジール

この世界にとっては特別な存在であるはずの御使いもまた、一人の人間であることに変わりはない。そんな御使いからあるべき世界

を奪った揚句、全く関係のない世界を救うように願うのは自分勝手
としか言いようがない。

それがわかっていてもなお、ハインツルは御使いを召喚せずには
いられなかった。

500年にも渡る、長く悲しい戦乱の時代を終わらせるために。
夢物語の中でしか存在しないと考えられてきた平和を現実のもの
とするために。

「それは…大変申し訳なく思っております」

声を震わせながら、ハインツルはレンカに頭を下げた。

召喚に際し、彼が想像していた御使いはあくまでも成人した男性
だった。戦乱を終結に導くことのできる御使いが、年端もいかぬ少
女の姿をしているなど誰が想像できただろう。

戦場とは男が赴く場であり、女性が赴く場ではない。

御使いが女性であることが事前に分かっていたならば、おそらく
召喚の儀式など行わなかっただろう。

だがすでに召喚は実行され、御使いの少女は彼らのもとに降り立
ってしまった。

「申し訳ないでことが済むのなら、この世は犯罪者で溢れかえって
しまうわね」

偉そうに胸を張って告げるレンカに、ハインツルは返す言葉がみ

つからない。

大魔術師長という偉大なる地位にあるハインツルが、たった一人の少女に圧されるなどこれまでなかったことだ。

バルドヴィンは何とかしてこの場を納めなければと思いつつも、なかなか二人の間に割って入ることができないでいた。

「とまあ、ハゲおじさんを威圧するのはこのくらいにして、今後の私に対する待遇がどうなるのかを聞きたいわ。いくら私があなただちの予想を裏切る淑女^{レディ}だったからとはいえ、まさか城下に放り出すなんて真似はしないわよねえ？」

ハインツルにじわじわと圧力をかけていたレンカだったが、突然話題をかえて周囲を取り囲むようにして起つ男たちに尋ねた。

「そ、それはもちろん！ 御使い様が男性であれ女性であれ、後召喚に応じていただいた以上は私が責任を持って御身を保護、」

「いや、そなたの身柄は余が預かる！」

ハインツルの言葉を途中で遮って、バルドヴィンが名乗りを上げた。

「へ、陛下！？」

「何をおっしゃいます、陛下！」

ハイドルフとアジッチが驚きに目を見張るが、バルドヴィンは全く意に介することなくレンカの前に歩み出る。

「リディアーナがこの地へ召喚されたのは、余がフレンツルに許可を与えたせいだ。つまり、そなたから生まれ育った世界を奪った責任はすべて余にある。そなたが御使いとして世界を救うにせよ、そうでないにせよ、余は王としてそなたを保護することをここに誓おう」

まっすぐにレンカを見つめて告げるバルドヴィンを見つめ返しながら、

「……やだ。バルったら、思っていたより王様らしくて、カッコいいんじゃない？」

と、レンカをよく知る人間が聞いたら鼻から飲み物を噴出してしまっくらいには彼女らしからぬセリフを口にした。

「でもまあ、ハゲの大魔術師長に保護されるより国王の城に保護される方が生活の保障もバッチリだし、選択の余地はないわよね。ふふっ、遠慮なくお世話されてあげるわよ、バル」

あくまでも偉そうに言いながら、レンカは塵ひとつ落ちていない美しい大理石の床に置いていた串焼きの包みを取り上げると、その中から一本の串焼き肉を取り出して強引に握らせた。

「お近づきの印にこれを差し上げるから、ありがたく受け取りなさい。貴女にとっては庶民的な食べ物だろうけど、味は最高よ。そしてこの場を借りて私はあなたたちに約束してあげる。あなたたちの言う“平和の御使い”として、この世界に平和を導くことを」

レンカの言葉にハインツルは目を輝かせ、彼以外の3人は驚愕に

目を見開く。

「平和を望むのならば、“平和の御使い”の名の下に、私を崇め、奉りなさい。多くの人間が平和を望み、争いを回避しようと祈りを捧げ続ければ、その祈りが力となって私を突き動かすのだから」

少女とは思えないほど大人びた視線をバルドヴィンたちに向け、大胆な台詞を告げた後は腰に手を当てて“ふっふっふっふっふっ、はぁーっはっはっはっ！”と淑女にあるまじき高笑いを発しながら、レンカはその場にいるすべても者たちを自分の創りだした空気の中に引きずり込むのだった。

アヴァンジュールへGO！ ～4～（後書き）

中途半端と思われるでしょうが、このお話はこれにて終了です。続きは別タイトルで『私を崇め、奉れっ！』シリーズとしてUPしますので、ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204u/>

アヴァンジュールへGO！

2011年7月28日04時23分発行